

所属・資格 地理学科・教授

申請者氏名 井村 博宣

研究課題		アユ養殖地域の変容に関する地理学的研究
報告の概要	研究目的 および 研究概要	<p>わが国のアユ養殖業は、日本経済の高度成長に伴い、所得の増加や食生活の向上と多様化が進み、東京・大阪等の大都市を中心にアユの需要が急速に拡大するなかで、養殖産業として本格的な発展をみた。しかし近年、全国的な規模で廃業者が増加しており、アユ養殖業は衰退傾向を強めている。時間と空間の科学である地理学では、この間における養殖地域の土地利用は研究の対象であり、とりわけ大規模な産地のそれはとくに研究意義も高いと言えよう。</p> <p>そこで本研究では、1990年頃まで全国最大のアユ養殖産地を形成していたが、その後顕著な衰退傾向を示す徳島県的那賀川平野を研究対象地域に選び、養殖地域の土地利用の変化について、自然・社会条件の変化に留意し時代的に特徴付けながら考察した。</p>
	研究の結果	<p>徳島県的那賀川平野では、1964年以降新規参入する養殖業者が急速に増加し、わずか数年にして全国最大のアユ養殖産地の形成が進んだ。養殖業者は、地下水が豊富で地価の低廉な旧河道（旧那賀川分流である旧岡川）へ集中する立地の特色を示した。しかしながら1973年に生じた第一次石油危機を転機に、アユ養殖業界は激しい産地間競争の時代を迎え、量産化による生産費の軽減（スケールメリットの追求）が経営の存続にとって必須化した。那賀川平野では、水条件の不利な上流・下流地域で休廃業者が増加し、廃墟と化した養殖放棄池が顕在化した。その後1990年代中頃以降になると、アユ冷水病の蔓延等の影響を受け、平野の中流地域でも廃業者が増加して廃業池が増加した。他方、当該地域ではほぼ時期を同じくして電子工業の発達がみられた。近年、廃業池は前述のものも含めて工場用地や宅地等への転換が進んでいること等が判明した。</p>
	研究の考察・反省	<p>今回の研究では、時間や予算等の制約もあり、最大産地的那賀川平野を対象地域に選定して進めた。しかしながら、アユ養殖産地にはほかにも衰退の顕在化している事例がみられる。そこで、今後は他産地に関する土地利用の変化について継続調査する必要があるだろう。</p>
研究発表 学会名 発表テーマ 年月日/場所	なし	※この欄は、本報告書提出時点で判明している事項についてご記入ください。
研究成果物 テーマ 誌名 巻・号 発行年月日 発行所・者		